

お金とは、脳の活動が外部に出たものである。それが常識になっていないのは、たぶん脳について考える人がまだ少ないからである。乱暴に言えば、神経細胞が使っている電気信号の一つ一つが「一円」だと思えばいい。

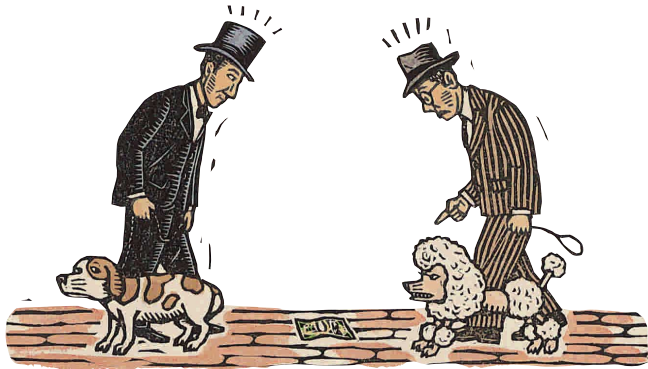
脳科学そのものは進んだが、その成果を社会が利用するまでには、まだ時間がかかる。根本的な思想の変化は、ゆっくりと起こるので、当座に間に合わないことも多い。脳科学と経済学の関係も、そうである。ただいずれは、両者がよく一致することに気づくであろう。それでも、「脳と経済なんて、なんの関係もない」と思っている人が、まだほとんどのはずである。

言葉を使うのは、人間だけである。同じように、お金を使うのも、人間だけである。なぜなら動物のなかではとくに人間だけで、大脳の新皮質が大きくなったからである。新皮質はユニット構造をしているので、進化上は短時間で大きくすることができ、各ユニットは類似した機能をもつので、アナロジの能力が強くなる。ここまできると、もうわからないという人がいるかもしれない。

アナロジとは、あれとこれとが、「よく似ている」「そっくりだ」と思えばたら

脳とお金

養老孟司



絵・森英二郎

きである。端的に言えば、「同じ」というはたらきである。「同じ」というはたらきがあるからこそ、人間は言葉が使える。それにも気づいていない人が多いであろう。世の中にあるすべてのものは、じつは一つ一つ違っている。それを言葉にすると、「同じ」になってしまう。すべての人は「違う人」だが、人という言葉にすると、同じになるではないか。

「同じ」というはたらきと、「交換」とは本質的に「似ている」ことに気づかれるであろう。交換とは、交換される両者がある意味で「同じ」であることを意味しているからである。お金はその交換の媒介物である。

動物にはそれが無い。かれらは「同じ」を理解しない。だから言葉も使えないし、お金も使えない。動物は「交換」もしないであろう。なぜ動物が「同じ」を理解しないかというと、動物は感覚の世界に住むからである。感覚はかならず「違う」という。現代人はそれに気づかない。なぜなら「同じ」という世界に入り浸りだからである。現代社会から言葉やお金を取り除いたら、社会が消える。つまり今の社会は「同じ」という脳のはたらき「そのもの」なのである。



ようろう・たけし 解剖学者・東京大学名誉教授。1937年鎌倉市生まれ。平成元年『からだの見方』でサントリー学芸賞を受賞。平成15年『バカの壁』で毎日出版文化賞を受賞。